

佃原

三浦梅園著
三枝博音註・解説

佃原引

今之俗、人家買貧民之失產者、為奴婢焉。有周期者、有半期者、有更カハル日者、有累歲者。出入之候、各地有其風。總謂之奉公。蓋近年、儉歲則不雇、而多不得以就食者。豐年則直遽騰貴、而多不得以買奴者。且若今年、若以麥佃量之、則健奴則上三十石、雖至疲弱者、而不減四三十石、然而考其人、則傭之勤、終不能償其直也。上田君怪焉。乃者辱下問。嗚呼晉也細人、量腹而食、稱身而衣、豈知其他焉哉。雖然、區々之心、竊以為關係不ナラ小。因不自量、探其原、而及其派矣。以為一冊子、命以佃原、以答來意、雖似有漆室倚柱之嘆、而実同杞國憂天之愚。惟茲燕石、胡能補天、一看置之於庶下、不然、將有下比子於宋人者。

安永癸巳四月壬辰

価原引

今の俗、人家は貧民の産を失へる者を買ひて、奴婢と為す。周期^二なる者あり、半期なる者あり、日を更るく^三する者あり、歳を累ぬる者あり。出入の候、各地其の風あり。總べて之を奉公と謂ふ。蓋^{けだ}し近年、儉歳^四には則ち雇はずして、而して、以て食に就くを得ざる者多し。豊年には、則ち直^{あた}直^五遽かに騰貴して、而して、以て奴を買ふを得ざる者多し。且つ今年のごとき、若^もし麦価を以て之を量らば、則ち健奴は則ち十石に上る。至つて疲弱の者と雖も、而も四三石に減ぜず。然るに、其の入を考ふれば、則ち傭の勤は、終に其の直を償ふ能はざるなり。上田君怪^六しむ。乃ち下間を辱^{はず}うす。嗚呼、晋や細人なり、腹を量つて食ひ、身を称^{はか}つて衣る、豈、其他を知らんや。然りと雖も、区々の心、竊^{ひそ}に以て関係小ならずと為す。因つて自ら量らず、其原を探りて、而して其派に及ぼす。以て一冊子と為し、命ずるに価原を以てし、以て来意に答ふ。漆室、柱に倚^よるの嘆有るに似ると雖も、而も実に杞国^七の天を憂ふるの愚に同じ。惟、茲の燕石^八、胡^{いづ}んぞ能く天を補はん。一看して之を庶^九下に置け。然らずんば、將^{まさ}に子を宋人に比する者有らんとす。

安永癸巳四月壬辰

価値原

豊 二子山人 三浦 晋 著

禹謨^{一〇}に、徳惟善^クレ政^ヲ、政在^レ養^ニ民^ヲ、水火木金土穀惟修、正徳利用厚生惟和^ス、といへり。水火木金土穀、これを六府と云ひ、正徳・利用・厚生、これを三事と云ふ。後世の治、千術万法有りといへども、此六府三事に出でず。禹謨に、水火木金土穀といへるを、其後は穀を土に合して、五行とも五材ともいへり。天下の至宝といふ者は、此六府なり。禹謨の後、洪範に是を五行と謂ひて、箕子の所^ニ述^{スル}、始めて禹謨に違ひて、後世五行家の禍胎とはなれり。已^ニに尚書に出でたれば、後世の人、これを左右^ト動かすことならで、其後の歴々方も、色々の曲説を設けて調停せり。されど天地の條理を取りて、禹謨と相照して是を觀れば、箕子の誤伝掩ふべからず。古の聖人と云ふ者は、天下を有する人なり。これを王者と云ふ。王者の材とする所は、水火木金土穀なり。城郭橋梁、屋壁舟車、耒耜^ニ釜甑、刀劍陶瓦、百の器械、烹熟煨炙、衣服飲食、何れか五行の外に出づ。是れ天下の至宝にして、得やすく、塞^ミやすく、足り易き者にして、必ず得難き者にあらず。得難き宝は、宝にあらず。たとひ連城の壁、十二乗を照すとも、燈火の千家万家に満ちて照すの功に比すれば、対用すべきにあらず。此故に得難きの宝は、得ずしてもすむ者なり。得やすきの宝は、民生須^シ臬^ヲも離るべからざる者なり。むかし人質樸にして、奢靡文飾に走らざりし世は、是にて用足りたり。世移り俗變じて、次第に移り飾る世になりて、得易く塞^ミ易き者の、財たるを忘れ、謾に得難く給し難き者を求めて、至宝と思へり。其至宝は、無用の者にして、王者の宝は有用の者なり。

我国は漢土に比すれば、おそく開けたる故、風俗も最も淳樸にして立ちけり。されば銀は、人皇四十代、天
 武天皇白鳳三年、対馬より出だし、銅は四十三代、元明天皇和銅元年、武蔵の国より出だし、金は四十五代、
 聖武天皇天平二十一年、陸奥国より貢すといへども、然^ままで多きにもあらず。錢の通用も、白鳳以来有りしか
 ども、今の様なる事にはあらず。博多にもろこし船来りし頃は、宋錢を以て物を辨じ、近く室町殿の頃までも、
 明朝永樂錢にて事すみぬ。東山殿は、国用乏しとて、三度まで明へ錢乞はれし中にも、文明の頃乞はれしには、
 十万貫を賜はらば、国用足らんと歎き申されき。十万貫幾ばくぞや。今の富人一家の産とするにだも足らず。
 然^{しか}れば今の錢幣の多きこと、辨ぜずして知るべし。かく迄財貨に富める世を、金銀少き様に、心得たるは辟事^{ひがじ}な
 り。一通りに考ふれば、金銀少ければ、世の中貧しく、金銀多ければ、世の中ゆたかなる者かと思へども、然^さ
 にあらず。こゝにて得と天下の至宝は、六府に過ぎざる事を察すべし。東坡いへる如く、使^{ドモ}天^{ヲシテ} 而雨^サ珠寒^{ヲユル}
 者不^レ得^ニ以為^レ 襦^ト。使^{ドモ}天^{ヲシテ} 雨^レ玉飢^{ヲユル} 者不^レ得^ニ以為^レ 粟^トにて、金銀、瑠璃、砵磈^{しやこ}、碼碯^{めのう}、琥珀^{こはく}など云ひて、世
 には賞玩すれども、民用に何の益もなければ、王者これを宝とせず。是故に古の王者は、五官とて、水火木金
 土に各其長を置きて、治められしなり。金とは、五金の總名なり。分つていへば、金銀銅鉛鉄、合せていへば
 皆金なり。五金の内にては、鉄を至宝とす。銅これにつぐ。鉛これにつぐ。如何となれば、鉄は其価廉にして、
 其用広し。民生一日も無くんば有るべからず。銅は器物の用あり。鉛は軍中の用あり。金銀は有らば有る処
 の用あれども、無くて先づすむ者なり。さる程に、餘の金は此方にはおそく見え侍れども、鉄は神代^{かみよ}の昔よ
 り有りしと見えたり。金銀は、諸貨に易^かへて用ゆるを以て其用とす。金銀並に錢、これを幣と云ふ、珍にして
 小なり。諸貨の重大にして、移し難きにはこびをつくる者なれば、其用舟車に近き者なり。金銀は貴重なり。
 能^よく大物を運ぶ。錢は賤しふして衆し。能^よく小物を運ぶ。貴賤軽重あるを以て、銀以て金を分つべく、錢以て

銀を分つべし。此故に、是を金銀といへば、錢も亦其内にあり。先づ天下の勢を慮る人は、能く財の有用無用を辨知すべし。譬へば海内に如し此沢山に充る所の金銀、今悉く盡果たりとも、他の五材あらましかば、民生立たぬと云ふことの有るべきや。蓋し金銀は処々出づる処有りといへども、佐渡の山天下に甲たり。上杉謙信、佐渡を攻め取り、金を取られしかば、国用に饒に有りし由、豊臣太閤知り給ひて公料となし、金を採られしかども出でず。慶長五年、関が原事畢りて後、銀を出だすこと夥し。銀やんで金を出だす。今に至りて絶えず。有然錢は、白鳳以来、元明の和銅開珍、孝讓の万年通宝より、絶えず鑄給ひしかども、甚だ少き事にやと思はる。異国世々の錢は、京錢と云ひき。是は小田原氏康、東国を領せられしに、時の勢ひ永樂錢貴くして、他錢四五文を以て、其一文に兌しかば、他錢を禁ぜられし程に、関東は専ら永樂錢行はれて、他錢をば、びたとていやしみ、京畿には他錢盛んにして、これを京錢と称しき。慶長の比、錢鑄けると見えて、稀に慶長通宝を見ることあり。輪郭字樣、頗る明錢に似たり。開元乾元之錢は、異国千年の故物なれども、得難からずして、慶長通宝は得難ければ、幾程も鑄ざりしと覺ゆ。慶長十三年永樂を禁じ、京錢を用ひしより、永樂多くはつぶしに成りて、世に隠れぬ。寛永十三年、猷廟、江戸と近江坂本と二処にて、寛永通宝を鑄さしめ給ひしより、財用世に饒になり、諸貨の通利自在なりしかば、諸貨を賤しみ、金銀を貴む風とはなれり。金銀貴くして六府賤し。六府賤しくして国本薄し。姑く其故を説くべし。譬へばこゝに一島あり。土地人民足り、米粟・布帛・魚塩、他島を仮らず、一切事足り、唯金銀のみ無からんに、民粟を以て器械庸作に易へて、金銀の貴きをも知らで立たざる事やあるべき。追々に錢一万を入れて、他の用を通ぜんに、一万の錢、其一島の用を足らしむべし。是より増して十万に至らば、十万の錢其一島の用とつり合をなして、一万の錢決して一島の用を辨ぜじ。其初は島の諸用一万の錢とつり合をなし、米一石五百錢に当らば、其五百錢、以て一奴を買ふ

べし。又入れて十万に至る日は、一石の米五千錢につり合ふべし。此時五百の錢、纔に数十日の人を雇ふに過ぎじ。然れば前の五百錢もてると、後の五千錢もてると、数は十倍すれども、用は異なることなし。乃至増して千万億なりとも、一島に出だす所の米粟・布帛、多きを増さじ。米粟・布帛多きをまさずして、独り金銀のみまさんに、多きと少きとかはる事はなく、多ければ多き程、煩しきを増し、その多き金銀に就いて、遊手を増し、天地より生ずる財を費す者、次第に出来るべし。我国の昔も、幣はなくて立ちしなり。和銅の比、太宰府及び播磨より、始めて銅錢を獻ぜしに、これを民間にしき、民に交換せしめし時は、穀六升に付、一文なりしとかや。蝦夷などは、今にその土地の産物を出して、我米穀烟酒をかえて、錢を用ひずとなり。

此故に金銀多ければ物価貴し。金銀少ければ物価賤し。物価賤しきは、金銀の貴きなり。物価貴きは、金銀の賤しきなり。諸工の造り出だす所の者を見るに、古代の物は精巧にして、今の物は粗悪なり。是れ其用の広きより起るといへども、半は金銀の賤しふして、物価の貴きに係れり。されば漢の初、天下に縦して恣に錢を鑄さしめしかば、米一石五千錢に至りしなり。漢の一石と云ふは、今の京升にては、大概二斗程の事なり。其後、幣の勢を抑へ、段々人を農にかへし、趙過など云ふ人出で、農の道を教へ、耕をすゝめ、代田を復し、後には一石の価五錢に至りしなり。天下の勢をとる事を権柄といへり。権とは称の錘なり。柄とは其錘を自在によくつり合はするなり。今衡は持すれども、懸る者の輕重を称錘をもて自由にする事あたはずんば、権柄を何にかせん。称錘は重きをまさず、輕きを加へず、輕ければ輕きに從ひ、重ければ重きに從ひ、つり合をつけて平を持す。もし権柄を執るの人、米粟布帛、百の器財、費用と金銀と、其つり合を見て、多少其宜しきを得せしめば、増減に從つて平を得べし。此故に、称錘をかへよとにはあらず、輕重に從ひてつり合ひをとる事なり。これを執権柄といふなり。然れば金銀の多少は、強ひて有国者の患とすべきことにあらず。

唯、金銀の用は何物ぞ。米粟布帛、百の器財、庸作の用は何物ぞと察すれば、金銀の盛に行はるゝの有益無益知るべきなり。今、金銀の通用を好むこと、独り日本のみならず、万国同じく然り。万国同じく金銀を好むといへども、金銀の多き事、我國の如きは稀なり。其徴には、海舶の長崎にて交易する者、価太廉なり。商賈の手に入り売買する日、和物の価と相比すれば、海外直廉なる事知るべし。金銀少ければ、少きにてつり合ひ、多ければ多き程のつり合ひになる者なり。されば国家の始は、米価一石三四五六斗、金一兩に当りし時は、諸物の価も廉にして、士庶の苦しむ沙汰もなし。元禄十二年己卯八月十五日の大風に依りて、一兩纔に七斗を糴ふ。是より歳荐に登らず、工商の営、食に給するに足らず、都下餓莩多し。これ憲廟職に在せし日なり。それより憲廟の世を終へ、文廟職につかせ給ひ、正徳元年辛卯の秋、米価や、賤くなりて、壬辰の春に至りては、九斗一兩に相当れり。章廟の時、乾金の沙汰あり。有廟の時、西国の苗稼悉く腐るに逢ひて、享保辛丑の夏、一兩纔に米六斗餘を糴ふ。元禄の頃糴俄に貴とかりしには、餓莩多かりしかども、二十餘年これに慣れたれば、治生の道これに居り合ひ出来たれば、これが常となりぬ。元禄以前、米価賤しふして、士庶苦しまず。元禄の始、米価貴ふして、士人は利を得、工商は飢ゆ。以来米価依然として、工商は苦しまず、士人は餒ゆ。もし今日米価、元禄の旧きに復せば、士人手足を措く地なけん。是れ居合と居合ざるとの間にして、権の入用若か有る時の事なるべし。

是れ春台經濟録による江府の米価なり。又、東涯の盍簪録を読むに、先づ元明天皇、民に幣財交通の道を教へ給ひし始、和銅三年中為市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、而貨通といへば、其由つて来ること最も遠し。然して諸貨の能くする所は、金銀の能くせざる所にして、金銀の能くする所は、諸貨の能くせざる所あり。是を以て、諸貨は物大にして数積む。運漕甚だ難し。夫れ金銀の用とする所は、則

ち鎮西の米粟、舟車を仮らずして、関東にして炊ぐべし。北陸の布帛、牛馬に駄せずして、南海にして依るべし。此故に旅行の人、万里糧を裹まず、腰纏ようてんの用、車馬と敵することを得。諸貨の如きは、通利悪しき程に、米は衣と成り難く、衣は薪と成り難く、金銀銅銭の小物は、分つて用ゆべく、大物は聚めて償ふべきの自在しに如かざる事遠し。是れ天下之靡然としてこれに向ふ所なり。蓋し金銀銅の三幣、金は大用有りて瑣碎ささいに用ひ難く、銭は小碎せうさいに便にして、大用に便ならず、銀は中間にあるものにして、三幣の代る代る用をなすところなり。昔は人質にんしつにして、金は砂金、銀は炭吹すみ様のもの、多く通じたり。天正の詔を引きて曰く、諸国之地、江山遐阻かたて、負担之輩、久苦ム行役、宜下持ニ一囊ソ銭ヲ二作スとあり。此時、銭貴ふして銀賤し。二十文以て銀一銭に当る。新銀出でて八十文、以て銀一銭を買ふ。然れば正徳中、脱粟米くろこめ二百銭と云ふも、四貫文なり。油九銭と云ふも、百八十文なり。今よりして觀れば、世豈あに如此廉価の物あらんや。今文字銀、元文元年発行の時、十五貫目を以て、享保銀十貫目を收むれば、銭五十文上下、以て銀一銭に替へたり。然るに今三幣愈そあく麤悪、金黄ならず、銀白ならず、新鑄の錢鉄を用ゆ。若し痛く擲てば碎く。物価歳々に増す。賤人其勢の止る所を知らず。

安永壬寅十月追加して曰く、予この書を著する時、猶銀一銭、錢六七十文に当る。今は已に百を過ぐ。而して米価京師浪華、百銭に充つと伝ふ。春來猶価を増すべし。

夫れ金玉はもと土石の精英にして、得難く朽ち難し。是を以て、至小以て大に対すべく、米粟布帛、諸貨の擁塞を通ずべし。神農、日の頃より、大判、小判、丁銀など始まり、慶長四年、始めて一分判出来、慶長六年の後、大判、小判、一分判、丁銀、豆板等改めらる。これ国家の造幣にして、以来元禄、享保、元文、近來に到つて三幣色々の製ども出で来りしなり。夫れ金銀は幣の用を主とす。民用に於ては鉄を主とす。然して銅

は幣器兼用ふる者なり。金銀若し幣の用を除けば、刀の縁頭、仏殿の莊嚴、漆匠の描金など、玩物に過ぎず。薬用も有れども、要薬にはあらず。されば近来は、費広くなりて、然までに多き金銀、猶給する事能はず。楮鈔大に世に行はる。金銀の用は、唯諸貨運輸の用ばかりなれば、楮鈔にても、飛錢にてもすむ者なり。餘貨の如きは、寒を凌ぐことは布帛にあらざれば能はず。飢を愈すことは、米粟に非ざれば能はざるにて、金銀本来の面目を知るべし。此故に天下の権を執りて、經濟に心を用ゆる人は、有用の貨を日々に生殖し、無用の貨を貴ばぬ様に致すべき事なり。金銀を以て天下の豊儉を病む人は、回天の功は有難かるべし。大学に財を生ずる大道を、生之者衆、食之者少、為之者疾、用之者舒、則財恒足矣といへり。是れ則ち禹謨の利用の工夫なり。有国者常に此語を体認せば、天下將に指掌に在らんとす。然るを今の世は、何にもならぬ金銀を、何にもかへぬ至宝と思ふより、只上も下も、寐ても寤ても、金銀を聚る工夫の外他事なし。人は四民とて、士農工商の四に過ぎず。士は、上に事へ下を教へ、礼義を道とし、政刑を権とし、社稷を守り、国土を安んずる者なり。農は、黍稻桑麻を作り出して、自他を養ひ、筋力を以て徭役を務め、餘算を得て、工商と相通ずる者なり。工は、天下には色々の器財なくてかなはぬ者故に、朝夕其道を鍛錬し、百の器物を造り出し、民生の用に不自由なき様にする者なり。商は、農のつくり出だせる米麦布帛、工の造り出だせる百の器械、こなたに餘りかなたに足らず、此れにあり彼になきを通用させて、天下の用を成す者なり。此四つの者は、一つも闕けては、天下の用を成しがたし。是を以て人たる者、士農工商の本業に本づき、各職分を務めて怠らざるを、敬んで天に事ふるとするなり。此外に遊びて、民の用をなさず、天下の物財を費す者を、遊民と云ひて、国家の蠹とするなり。是を以て金銀は、四民共に有無を通ずるの要物なれども、専ら交易を事とする者なる故に、金銀の運びを仮ること専要なり。頼朝、府を鎌倉に開かれしより、足利、織田、豊臣、継ぎ興るといへども、唯馬

上を以て天下を治めんと欲して、民を軌物に入るゝの挙なく、実の太平と云ふ事は無かりしに、国家興りしより、徳妖氛を消し、治封建にならひ、百六十年来、四海波を揚げず、吾儕小人に至るまで、緩帶鼓腹、早く寐ね^{ひたけ}肝て食ふことを得るも、何れか恩波の及べる所にあらざらん。蓋し^{けだ}国初、藤堂高虎、足利の先轍を鑑み、自ら夫人公子を東都の邸に入れられてより、諸侯後るゝ者なく、身封国に就くといへども、家東都にあり、隔年朝覲の礼有りて、割拋虎視の勢、変じて四海一家の化となり、戸とざゝぬ御世となり待りぬ。此故に、今日諸侯の費用、朝覲を主とす。次に公事^{てつたひ}属役の事あり。然りといへども、是はこれ主盟控擧の権のある所、これを戦争の難に比すれば、九牛が一毛なり。謹んで財を節にせば、国用は定めて足るの道あるべし。人久しく太平の化に浴し、安樂に慣れ安んじ、奉養の道、日を追ひて華靡に走る。是故に、飲食は人生を養ふの用を外にして、遠味珍品、烹熟の道、調和の品、日暮れ夜明るに連る。衣服は寒暑を防ぐの用を外にして、巧を銜ひ奇を競ひ、月を重ねて一端の帛^{きぬ}を繡にし、時を踰えて一匹の錦を織出す。燕安^{いんあん}の屋宅、隨身の調度、彫幾刻鏤を窮め、財を生ずるの道日々に疎く、巧を費やすのこと歳々に多し。こゝに於て、人巧を費すの道を日々に求めて、金銀を運ぶの巧漸になる。博奕^{ばくち}・富^{とみ}など云ふ様のことを興行し、富者は貯へて其息をとり、富まざるものは宮々として、東に走り西に走り、天地生々の財を唯飲潰^{ひぶ}し食潰^{ひぶ}し、日を終へ年を終ふ。終には困碁^{つひ}、象戯^{しょうぎ}、俳諧様の物までも、賭になり待りて、殺風景甚し。

されば、金銀の用貴ければ、其権重し。重ふして貴ければ、人能くこれを積む。積む者多ければ、乏しき者多し。然れば、今の多債に困窮することは、金銀多きの致す所なり。金銀は無情の物なれば、人を苦しめん様なし。唯所置宜しきを失すれば、権傾くの致す所なり。噫、昔は天下国家を有するをこそ、富貴とは申し侍れ。然るに今の有国者は、媚を素封の家^三に求め、陶朱猗頓^あが徒、齊魯の如き国を見ても、己が家内の出納^{すめたう}の如く思

ふ程に、貴き者は貧しく、賤しき者は富みて、富貴胡越を隔てたり。是を以て、今先づ金銀に餒ゆる者は諸侯なり。廉恥の風を導かんと欲すとも、倉廩実て礼説を知る民なれば、いかでか是を導き得ん。金銀既に多く、費用既に広し。債の多き所なり。古を稽へ今を察するに、金銀当今を盛なりとす。然して金銀に窮するも、今の如きはなし。故に人々相あへば、唯金銀のなきを語る。天下に通じて然り。天下に通じて人皆金銀のなきを語らば、何れの処に隠るゝとする、試に今金銀のある所を索むるに、諸侯の国よりして、士農工共に金を蓄へず、然らば則ち商賈にあること知るべし。商賈一同ならずといへども、其能く巨万を積むもの他にあらざ。商賈已に富を有すれば、千里控掣の権、半は已に其手に帰す。蘇秦張儀者流、會計の道を以て往々六国の印を帯ぶ。こゝに於て、其徒身公門に鞠躬すといへども、心実に千乗を吞む。其心農工を見ること奴隸の如し。唯彼見て奴隸の如くするのみならず、農工も亦彼を仰ぐこと主君の如し。こゝに於て、四民唯金銀のみを見て、是れに走ること水の下に赴くが如し。当今建橐の世なれば、兵馬の功は立つべき様もなく、寰宇艾安なれば、修文の業も施す所なく、屯を亨し蹇を濟ふの用、文武の徳にもまさる故に、金銀だに富める人は、無芸無能にても、不礼不徳にても、上下に渴仰せらるれば、最も興し難きは廉恥の風なり。こゝに於て是を借るものは、年々息を出し、これを借す者は、年々息を収む。借せば金銀世に散る様なれども、実は本錢を囫にし、以て天下の金銀を羅す。富家の息年を逐うて増せば、国家の用年を逐うて乏し。乏しければ上の人、下に求めざることを得ず。上の人下に求むれば、下乃ち上に給す。豊臣太閤以来、租税之法、三分之一地頭取之、三分之一耕民之を取る。昔戦鬪の世にさへ、是にて事足りしなり。今を以て国初に比すれば、人多く田野闢けたり。租税侯国皆昔より多し。されども費用昔にまさるを以て、百計聚斂の道興る。聚斂興つて、これを受くる者は農なり。農事本艱なり。これに加ふるに、百の徵求あり。終に生を遂ぐる能はざれば、民本務

を捨て、工商庸作、百の技術、水に走り山を分ち、百計して財を求む。已に多技に走れば、本産に怠らざる事能はず。深く耕し厚く培んと欲すれども得ず。肥えたる地は瘠せ、広き地は狡く、終に本産に放れ、流亡して游民となる者、数ふべからず。今、水に走り山を分ち、百計して財を求むれども、此れ亦聊か饑渴を救ふにもあらで、半は侯家に輸するなり。受けて納むる様なれども、これも償の為なれば、其実は侯家も農工も、畢竟富家の役をとるものなり。されば戦国の頃は、日夜鬪争やむこと無かりしかば、手を拱ぬいて人に命を授くべき様もなければ、人防禦を主として、僧も俗も、農も商も、其実は武士なりき。今や昇平の世の中にして、唯苦しむことは金銀なれば、上下おしなべて、唯一心専念金銀にあり。こゝに於て其形はさまざま、かはれども、心は何れか乾没に在らざらん。一得一失の理勢、誠にいかんともすべからざるものなるべし。されば今天下の事勢を聞くに、何方を尋ねても、郡県の人々は年々に減り、都会の人々は年々に増す由なり。是れ衡をとる人の最も眼を着くべき所なり。

夫れ天下国家を有する人の豊饒と云ふは、全く金銀の上にあらず。金銀を有して豊饒とするは、商賈のことなり。此故に今は上下交利を射て、錙銖を争ふ程に、悪しく心得たる人は、政を執れる身にも、商賈の術を以て国を治めんとする人もあり。乾没と経済と、同じく利を求むる者なり。其差別、商賈は利を以て利とす。経済は、義を以て利とす。昔鄒穆公、鳧雁の類を畜れしに、粟をば用ひず、常に糶を用ひられしに、折ふし糶竭きたり。有司これを民間に求めしに、民糶一石を以て、粟二石にかへんと云ふ。有司これを損なりとして、粟を以て鳥に畜はんと請ふ。穆公、否爾がしるところに非ず。夫れ百姓の手を煦して耕し、背を曝して耘ること、豈に鳥獸の為にせんや、粟米は是れ民の上食なり。何とて鳥にはかふべきぞ。汝小計を知つて大会を知らず。周の諺にも、囊漏三貯中一と云へり。夫れ君は民の父母なり。倉の粟をとりて民に移す。民に有り

ても我粟なり。鳥もし鄒の糶しひなをはまば、是れ我糶しひなを食むなり。何ぞ鄒の粟を害はんと有りしかば、是より下に至る迄、上のことに思ひつきて、上下一体の思ひをなしけり。国家を有する人は、国家を一身と見る時は、民にあると我にあるとの隔なし。商賈は人に有せらるゝを損とし、自ら有するを得とす。君其民を外にすれば、民の物を己に得て得とし、民に散じて損と思ふ。是を以て百計千慮聚斂こに在り。詩に、彼有遺秉、此有滞穗、伊寡婦之利といへり。政を執りて利を下に遺す、一視同仁、人に君たる者の利なり。誠に田地をしばしまで籍すれば、水難多し。幣を鑄るに物を雑ゆれば、盜鑄多し。租税重く上にとれば、凶年には庶民凍餒とうだして、大に府藏倉廩を費し、民疲れて、又急に農に力を盡すこと得ず。孝悌を誘ひ、礼義を勧めん暇も無ければ、上に内難多く、下に獄訴繁く、財を費し人を損す。是れ有国者、細民の利を以て利とし、民と利を争ふの弊なり。これ治国者の利、商賈の利と同じからざる所なり。

是故に庫の財を費して、国の風俗を励し、農を勧め工を利し、財貨を国人に積ましむべし。是等を費と見る程に勘定を入れて、元に合はぬことをば損とせず、是を市井の心と云ふ。是故に財を生ずる大道、生スル之者衆しとは、天下の財、日々此より出で、民の用をなす物なり。其品は水穀魚塩を始めとし、麻絮竹木等の類より、工人の造り出だせる物なり。夫れ権を執る人は、軽重己が手に従ふ。むかし乱世武猛の俗も、今は昇平游惰の民となれり。是に由つて思へば、今たとひ権、金銀に歸したりとも、大有力をして衡を持たせしめば、終に其錘を移し、人倫勤に復り、廉恥礼讓の風興るも、なか難らん。軽重に従つて権を移す人は、其病根をしるにあり。もし其本に本づかず、唯金銀を増減して、其平を持せんとならば、懸る者の重きを見て、錘を重くし、軽きを見て錘を軽くするの道にして、無術と謂ひつべし。宋の頃、錢ひたすらに増す程に、後は小さく軽くなりて、緹環錢とて縷に貫き水に入るれば、縷に引かれて沈みやらぬ程になり、物の価しきりに貴く

なりて、後には一斗の米価一万錢にいたりしとかや。近年錢は鉄となり、銀は鈔となる程、物価騰躍する者、縦環錢と同意にて、衡傾きし故なるべし。もし其柄を正さずして、其低昂に従はんとらば、金銀愈多くして、富家は則ち愈金を積み、貧家は則ち愈債を重ねん。悪幣盛んに世に行はるれば、精金皆陰る。夫れ富家、大なる者は巨万を儲へ、小なる者は數金を儲へ、小家は數金の家になり、大家は巨万の家にかかる。借る者は本錢にして、収る者は息を并す。小民の數金、大人の數万、其勢侷くして、同じく富家の為に金銀を殴者なり。それ叢には雀聚り、淵には魚聚る。叢に雀の聚る者は、鷓外よりこれを殴ればなり。淵に魚の聚るは、獺の瀬よりこれを殴ればなり。淵叢の力にて魚雀は聚らざれども、鷓と獺との魚と雀とを好む故に、却つて淵叢に聚るなり。金銀も其如く、富家の力にては、中々聚る者に非ず。債家これを殴る故に、倍蓰什佰、巨万に至る。

抑、債家何故にこれを殴るぞなれば、歳計の常に足らざるより成る。歳計の足らざるは、奢侈賄賂昔に倍して、制度未だ立たず、節儉の道行はれざればなり。されば神君三河にまませし頃は、知行とれる人の妻迎へにも負木と云ふものありて、婦には被かづかせ、負木に腰懸させて迎へし由なり。さる故に慶長十一年丙午、江城修造ましくて、次第に人民聚り会ひ、蕃昌斜ならざりしかども、竹輿とても武家願ひ達して用ひ、町家などの用にはあらず。橋本甚三郎と云ひしは、上の御用をも達する大家にて、後髮剃りて深入と云ひしが、珍しく洪張りの竹輿を免され、不案内なれば、下乗場に乗りこし、目附に糺され、難義に及びけるを、朽木民部、少輔殿見て、

橋本に、下るべき物が、のり物で、

深入をして、咎められけり。

と戯に挨拶有りてすみし由なり。是等も其類なきより、かゝる過はありしなり。唐も大和も、昔は馬なりし

が、いつしか輜盛のりものになり、今は下々まで用ゐる様になれり。馬は人の乗るものにして、人は人の乗る者にあらずと、古人これを畏れき。心あらん人は慎べきことなり。この比ころは、三絃さんげんなど云ふ者は、男子はもとより、士商の婦女に至りて、自ら奏かなでる様のことはなかりし由なり。何事も国初はこれにひとしかりしかば、財用の費もさまで無かりしなるべし。今諸侯の家、何れか節儉の令なからん。唯、滔々の勢かへ難く、且つ經濟に掣肘多く、或は任ずる所其人にあらず、任ぜらるゝ者其才を伸ぶることを得ざればなり。是を以て人君はよく識鑒を貴む。よく其人を目利して、挙げてこれに任じては、其一盃の才を竭さしむべし。掣肘とは、人に物を書かせて、後より其肘かひなを掣ひくなり。如何なる能書にても、後より肘うしろを時々掣かれては、書度かくだびに書損キじあり。書損キじさゝれて、其の過を忿らるゝこと、筆取りの難渋なり。是をもて、人主は人を得るに勞して、政をするには逸するものなり。事両ツながら全うし難ければ、廉恥の風荒めば、人賄賂を好む。礼讓の教至らざれば、人爭奪を好む。制度立つことなければ、華奢等を踰ゆ。今、其好むを好むに任せ、踰ゆるを踰ゆるに任せ、限なき人の慾を、極り有る財宝にて償はんことを求めば、天下の大山高岳をして、盡く金を出ださしむるとも、米粟布帛ふはくの至宝を生ずる者をして、其業を棄てしめ、衣食器械にもならざる物に、人巧を費さしむるにすぎず。是を以て、今たとひ金銀をして、天下の米粟布帛ふはくの如く多からしむとも、世唯債数の多くなるまでにて、至宝の生路は日々に薄く、人の賑ふことは有るまじきなり。但し、かくかたむきし勢に処するには、金持てるよりよきはなし。金を持もつべき様は、乾没にしくはなし。此故に今の富人は、十に九は商賈なり。其一つも、外面は異なる様にてても、其実皆廢居をつとむ。これに継ぎて世を渡るに易きは、游手なり。士農工は貧しき者なり。利を見て趨り、害を見て避くるは、天下の通態なり。故に今の士農は、本業をうたてに思ひなし、十に二三は工商にうつり、十に三四は遊手に移る。移れば、従前よりは生も遂げ易き程に、日

を逐ひ年を逐ひ、農を去るの勢やまず。農減ずれば財減ず。財減ずれば国本薄し。是れ郡県の籍年を逐ひて減じ、市肆の人日に随つて増す所なり。我見聞する所を以てこれを云ふに、此あたりにも、七八十年以前は、京畿大坂の辺より、兒女をつれ下り、家につかひて、近き頃迄も多かりき。今、其子孫猶幾も有り。今はこれより只管ひたすらに上ることばかりにて、下ることはなし。事小なるに似たりといへども、時勢変見つべし。

財貨控擧の権、已すでに商賈に属すれば、米粟布帛魚塩百品、生ずるをおそしと、皆都会の地に向つて輸す。輸するあとは、貧家は初より衣食に足らず、富家は纔わずかに其年衣食の料を留めて売る程に、農家の餘計、地を払つて空し。輸するむかふは、財宝四方より輻湊する程に、諸貨常に餘計を貯へ、其糶うりよねを停むれば、国郡食に乏し。糶かひよねを拒む日は、郡県金銀を仰ぐ所なし。これを以て郡県餘計なれば、惟是を都会に恃む。都会又之を巨商に恃む。郡県已すでに財宝に餘計なき程に、貧民皆本業を捨て、金銀を営む。営み得て穀郡県にかへる時、価前より貴く、量前より減ず。これに加ふるに送迎の費、又幾くぞや。都会はかく財費に富める地なり。游手ども日々夜々に聚り会ひ、文彩刻鏤、音声技巧、人の目を奪ひ心を蕩かすことを巧み衒ひ、良民力を盡して生出する者を費し、人の囊中の物を釣り出す。こゝに於て釣る者と釣らるゝ者と、同じく民の膏血を貧り費す。然れば金あれば成らざることなしと金を悦ぶ心は、吾儕小人、一身を安んずるの計にして、天下国家を有する人の悦びとすることにあらず。金銀の通用は、天地よりして観る時は、左の物を右に移し、右の物を左に移すに過ぎずして、布粟器械、昨日までなきものゝ今日は天地の間に来て、造化の功を賛け、饑渴を愈やし、寒暑を禦ぐの功に、何ぞたくらぶべき。然れば此至宝を、少しにても天地の間に生殖し、少しにても天地の間に存し、民の生々の用を助くる程、天に事ふる務はあらじ。唯勢偏にして、郡県に來歲凶饑の備なく、都会には游手貪費すの煩有りて、之を傷むの人に乏し、故に民の風に梳り雨に沐かみあひ、星に耕し露に耘りし膏血

を、文彩刻鏤、音声技巧の用に貪り盡し、其生ずる者をして閉ぢ、其費す者をして播さしむ。意有る者、豈あに蒿目して憂へざるべけんや。若もしこれを憂ふる人あらば、一郡一県を治めんにも、何とぞ人を一人にても農にかへし、一人にても遊手を本業に本づかしめ、財貨他より入るの路を開き、器械他に求めざるべきこそ肝要なれ、一国を治むる人は、他国を以て壑とせざることを得ず、白圭三三と禹と、勢同じからざることあり。さて、人の農に就き工に務め、士上に靡恥礼讓の風を誘ひ、民下に華靡淫奔の俗を改めば、遊手はいつしか少くなるべし。是を生スル之者衆、食ラ之者寡、為ル之者疾、用ル之者舒と云ふ。乃すなわち利用のことなり。用を利する者は、其生を厚ふせんが為なり。論語に、富マ之と云ふもの、乃すなわち厚スル生なり、今、市肆の日々に栄え、人の弥増いやますを蕃昌とはいへども、郡県の人も増し、市肆の人も増さば、実の蕃昌なるべきに、郡県の人は次第に減じ、市肆の人のみ次第に増し待らんは、豈あに感慨の一つならずや。王制有国の道を説きて、国無キ九年之蓄キ曰ト不足、無キ六年之蓄キ曰ト急、無キ三年之蓄キ曰ト国非ト其国也、と謂へり。当今の世は、控撃の権金銀にあり。これを以て、たとひ人家餘三三んの布、餘んの粟有ても、これを蓄へんとする人はなし、是れ貯へざる人の罪にあらず、金銀の便利他貨に勝ればなり。便利すべ己に他貨に勝る、誰か重かさ高く運はこ悪く、息そくを生ぜざる他貨を貯へんや。この故に民こぞつ挙て他貨を売り、貧者は富家の旧債を償ひ、富者は貧者の求めを待つ。吾わが儕小人、勢しからざること得ず。吾わが儕小人の利とするところ、有国者の利とする所にあらず。其故如何となれば、國中の米粟布帛、金銀に兌かえて都会に輸す。然しふして其の兌かゆる所の金銀、細民の手にとゞまらざれば、凶饑饑軍国の慮、何を以てか之に供せん。さるにより今の世は、一年立たちと云ふ者なり。一年立たちと云ふことは、一年に生ずる地上の財を、一年に費し盡つくすなり。もし天下永安の為にこれを憂ふる人有らば、金銀を只彼方あな此方こへ廻替へさすることを省き、米粟布帛ふはく、生殖蓄藏の道を謀るべし。其年に生ずる者を空しく輸し盡し、都会遊手の娯楽に供すること、惜むべ

きの甚しきなり。古人は三年の蓄なきをだに、国非「其国」と云ひしなり。然るを、稻登る時は、麦民間に盡き、麦熟する時は、粟民間に竭く、民いかでか荒歳を凌ぐことを得ん。誠に一得一失の理にて、昔金銀少かりし世は、諸貨の通利あしかりしかば、これを運び盡さずして、凶饑諸災の備も有りき。今金銀多く、諸貨の通利自由になりしかば、これを都会に運び盡して、旧穀、新穀に及ぶこと能はず。故に今控撃の権をとる者は、有金の家之を斂聚すれば、上下財盡く竭く。これを以て名は諸侯米粟を有する者にして、其実は富商に并せられて、纔の臣民を扶助するに難んず。米粟はもとより満易き者にして、もし一年豊熟するの時は、穀は食料に贏るものなり。贏る所を蓄ふれば、凶年に備ふべし。是を売り盡すに至りては、豊年の後の年、凶年の後の年に異なることなし。是れ天下の良民、金銀の為に游手の奴隸となる所なり。布帛米粟は、諸貨交易に便ならず、便ならざるを以て、金銀の用広し。是を以て金銀の用は急にして、布粟の用は緩し。緩きを置きて急なるを先んずる、勢然らざることを得ず。故に布粟にはこと足れども、金銀たらぬ故、布粟を貯ふるをば損と見て、足るも足らざるも、布粟は家にとぐめぬ故、金銀に富める人も、米粟に餘りなき事は相似たり。用多ければ借人多し。借る人多ければ、錢神足無ふして飛ぶ。用少ければ、借人少し。借人少ければ、錢権衰へて、飛騰の用殺ぐ。錢権衰ふれば、布粟蓄ふべし。布粟蓄ふることを得て、今年の熟、以て来年の饑を禦ぐべく、今年の布、以て来年の寒を禦ぐべし。有国の人は、強に己が府庫に物を積まぬとて、貧しきとは云ひ難し。昔乱国の頃は、下民も農桑の暇無かりしかども、そのの籠城、この對陣と云ふに、相應の兵糧は有りしとなり。今は昇平の世にして、纔に朝期属役のみなれども、其臣僚の扶持にだに乏し、万一辺陲の警もあらば、何を以て祖宗の意に答へ、国家百年の恩に報ぜん、遠き慮なければ、必ず近き憂あり。有国者の急務、何れか是より先ならん、四民は之を有国者に仰ぐ、有国者は是を有天下の人に仰ぐ。天下の勢は、有天下の人のなす所にして、

有国者の力の及ぶ所にあらず。一国の勢は一国を有する人のなす所にして、士民の力の及ぶ処にあらず。よく権をとる人は、能く勢をつかふ、勢をつかふは、譬へば砂を盆中に淘るが如し、左に走らしめんも、右に走らしめんも、皆手中にあり。然らば文に走らしめんも、質に走らしめんも、利に赴かしめんも、義に赴かしめんも、金銀を貴くするも、布粟を貴くするも、良民多からしむるも、游手多からしむるも、なすに従ふ者なり。天下一年立の勢は、有国者の回らすべきに非ざれども、一国の勢は、豈に一国の勢あらざらんや。其術即生之者衆く、これを食む者少く、之を為る者疾く、之を用ふる者舒なるにあり。今は天下太平にして、恩沢天の如くなれば何故かかる安樂に耽るぞと思ひ回らすこともなく、貴きも賤しきも、衣服飲食、居処交際、只日々に華麗に走り、有司も俸禄の外、賄を待みて事を辨ずる故、田地の租税も重からざること能はず、臣僚の俸粟も、減ぜざることを得ず。故に農に餘利を見せて、人を農にかへし、工に力をそへて、游手を力に食ましめ、財貨他国に出でざる様にと思ふなり。もし其病根を見ずして、未を追ひ、令を下して賄賂を禁じ、奢侈をやめんと欲すとも、礼樂講せず、制度立ず。民用の足らんことを求むとも、網を結ばずして魚を羨む類なるべし。先づ大勢を治めんには、大積りを知るべきことなり。蓋し十人の耕すを、一人にて食し盡し、十人の織るを、一人にして著盡さば、九人は饑寒を免れざるべし。此故に一夫耕し耘つて、其妻子を養ふべく、一婦蠶し繰つて、夫子に衣すべし、飲食これより美にすぎ、衣服これより麗に過ぐれば、其人には贏あれども、天下に通じては足らざるべし。有力の人は、匹夫と同じかるべきにはあらざれども、細民の為に慮るに於ては、察せずんば有るべからず。爽口は数金を盡すにあらざれば、一饗に供するに足らず。美服は数月の力を用ゆるにあらざれば、一衣となすに足らず。もし齊民の風俗、自然と此積りの外に出でば、争か饑寒を免れん、それ民を治むるの道は、赤子を保するが如しと云へり。君上は父母にして、民は則ち子なり。子は甘旨膏膩の病を醸

すをも、泥土雨露の衣服を損ふをも知らず、有るにまかせて用ひ仕まふ者なり。民もその如く、ちと耕して餘資有れば、色々のことを思ひ出して企て、僧巫の徒、縁を募り、游伎の輩、間を覗ひ、工人結構をなし、国の富む方に心のつく者にあらず。故に何程の仁政を行はれても、湯を以て雪に沃ぐが如く、財貨はとゞまる者にあらず、故に子の為に甘旨膏膩をひかえ、雨露泥土に衣服のぬれざる様に、節制を加へざれば、給する者は暇なく、用ゆる者は災をなす。災を身に受くといへども、節制を加ふる日は、父母を怨み泣き号ぶなり。細民は、己一身当前のこのみを見て、大勢を見ざる者なれば、或は一己に不便利、或は情慾に伸びざれば、嬰兒の父母を怨むる如く、左や右興じて、人心を動揺さする者なり。小利を謂ひて、大利を害する者なり。此時英断の君にあらざれば、其臣に任ずることあたはず、剛毅の臣にあらざれば、其業をなす事能はず。是を以て、政に制度を立つること甚だ要にして、膚たゆまず目逃がざる人にあらざれば、なし得ることに非ず。又制度に過つことあれば、物を害すること限なければ、仮初にも立易きことにも非ず。鄭の子産、政をせしに、都鄙有章、上下有服、田有封洫、廬井有伍、大人之忠儉者、從而与之、泰侈者、因斃之、かば、輿人之誦して、取我衣冠而褚之、取我田疇而伍之、孰殺子産、吾其与之と云ひしが、三年を経ては皆誦して、我有子弟、子産誨之、我有田疇、子産殖之、子産而死、誰其嗣之と云ふ。子産死するに及んでは、人皆慈母を失ふが如くに思ひしとなり。唯上にも目前にて、人によき人と謂はれんことをはかる人は、非常の功をば立て得ぬ者なり。非常の功を立てる者は、非常の才を抱く。非常の才を知る人は、非常の君なり。君才を用ふる日、譽る者半、謗る者半、利も又半、不利も亦半なり。苟も識明に断果なるに非ざれば、事を擾り人を損ふに過ぎず。故に古より君臣の値遇を以て難しとすること、故ある哉。故に制度を立てざれば、仁恵も益なし。夫れ産自ら養ふに足らず、或は餘計に迸散の路あらば、有餘不足の相去ること近し。王制に、量入以為出と

は、上王公大人より、下輿三四僮芻隸三五に至るまで、經紀の要語と知るべきなり。

さて天下一年餘計の布粟は、皆富商に歸し、富商これを都会に輸す。こゝに於て郡県空乏なり。凶饑全く都会に仰ぐ。都会空乏の変あらば、郡県給する所なからん。都会の物を蓄る、常平倉に非ざれば、本郡県に給する為にもあらず、畢竟游手ひじつてうでどもの餽餘はみあましなり。此故に、郡県布粟に餘計なく、都会積聚に蠹虫三六あり、穀は満ち易くして減り易し。さるによつて、一年年登れば、天下に穀満つ。一年年儉なれば、郡県穀盡く。満つれば人糧乏しからぬ程に、各職に就て本業に歸せんことを思ふ。盡れば糧に仰ぐ所なき程に、壯者は庸作たちもちに餽たちもちひ、弱者は乞丐こつがいに餽たちもちふ。本業を捨て、餘業に餽たちもちふは、勢の已むやことを得ざるに出で、其本心にあらず。故に年登るを見れば、遠客の歸舟に逢ふが如く、餘業を捨て、本業に歸らんとする程に、庸作する者希にして、餘業を務むる者怠る。こゝに於て、諸僦皆騰貴す。然しふして一年穀熟せざれば、雨後潦水たちま忽ち涸るゝが如く、又本業をすて、餘業に走る。こゝに於て諸僦又賤し。畢竟民一年立になりて、定れる業の餽たちもちふに足る者なければなり。夫れ人情誰れか本業に歸し、安きに就くことを願はざる者あらんや。是れ郡県に凶饑の備なく、一度は本業につき、一度は本業を離るればなり。もし真の太平を得んとならば、金銀の通利を貴ばず、餘布餘粟民家に蓄へしむべし。たとひ悪年にあふとも、みだりに本業をば失ふまじ。本業を失はざれば、僦に貴賤なきこと能あたはずとも、又格別のこともあらず。是故に国家の乏しきと云ふ者は、金銀の通利の快きに、布粟をつむの人なければなり。布粟を積む人なき者は、金銀を借人多くして、金銀の利、布粟に倍すればなり。利、布粟に倍して、運輸蓄蔵、布粟より便りなり。たとひ嚴刑を以てこれに臨むとも、この勢にあたるべからず。今の世の態をみるに、庸作をはじめ、其他の營につけても、多くは皆其人の本業にあらず。困苦の為に金銀にせめられて、已むやことを得ずして、姑しばらくこゝに雨やどりをし、雨の晴間を待つなり。空少しく晴れば、やが

てふるべき空とて、いかで久しく其木陰には留まるべき。さる程に、少しく衣食に休息あれば、女子は嫁し、男子は本業を求め、其務めに服せんことを願ふなり。其務めに服せんことを願へども、程なく年の荒るゝに赴き、たらしら餽ふの営みに懸ること、もとの木陰を立出でて、さきの木陰に雨を凌ぐの心なり。人に貧富の隔てこそあらめ、あ豈に人情に異あらんや。已に人情に異なければ、すて老たる親、馴来し妻子には、朝な夕なみもし、みえもし、打語らひ、親しき友どちとひ問はれんことを、願はざる者あらんや。しからば孰いづれか其本業を棄て、餘業につき、あ歓娛を厭ふて労苦を好む者あらん。身を売りて人の奴隷となることは、勢やむことを得ざればなり。然れば世を平観する時は、庸作の人は本業を求めてかへる程、悦ばしきことはなし。治国を以て任とする人は、庸作の徒の本業につくが本懐なり。今、貧民の田は富家に并せられ、貧家は富家の賃田うけまいを耕す程に、富家他手を仮らざることあたはず。貧家他主を恃たのまざることあたはず。もし陰陽變理三十七の手を経て、経界平に歸して、穀祿郡県に三五年をさゝゆること得、富家兼并せず、貧民本業に歸し、游手勤むる所あり、餘夫よく良民に左右して、餘事に務むる所あらば、本業他業を交々こどもとらず。物価高下ありとも、粗定準の有るべきあらん。すべて物には居り合ひと云ふ者あり。今の癖つきたるよりみれば、海内皆富まば、奴婢の買ふべき無く、傭作の人なくして、却て難義かへつなるべく思へども、其居り合ひを見ぬ故なり。今の貧民、一年は本業に走り、一年は餘業に赴く故に、物価燄動して定らず。本業人あり、餘業つとむる所あらば、四海富んで人苦しむることあらんや。古、仁徳天皇の朝には、三年までみつきをゆるさせ給ひしかど、宮牆あれたるばかりの沙汰あつて、其外さはれることも聞かず。今の世の心をもて觀れば、怪しき程に思はるれど、漢の文帝の時、鼂錯三六が計に従ひ給ひ、民に十二年租税の半を給ひ、明年、終に民田の租税を除き給ひしも、猶大倉三九の粟は陳々相よりしとなり。和漢古今の相違はあれど、地物を出すこと依然として、人の身の長も縮まらず、腹の

量もかはらねば、陰陽變理しやうりの手をからば、人々六府の真貨たるを覚り、九年の水、七年の旱とも、終つひにさゝぶる道なからんや。今は唯六府の運はこびとなるべき金銀、還りて主となり、平準立ち難く、豊年には豊年に苦しみ、凶年には凶年に苦しむ。仁人位に在ること有りて、豈あに豊年を苦しむことあらんや。称錘平を得ざる日は、重き物を懸くれば、錘さきへすべり、軽き物を懸くれば、錘あとへ隕るなり。今奴婢諸物、価の貴賤、事微なりといへども、閔係小にあらず。国家の権を執れる人、最も心を注ぐべき事なり。庸作の人の、遽にわかに価を増すことは、吾儕身わがせいの為に憂ふることにして、有国者の説よろこぶべきことなり。其故は、此機に乗り、小民をして本業に帰らしめ、兼并の道を察し、農をして専ら力を耕耘に帰せしめ、荒れたるを闢ひらき、堤防を脩し、彼寒苦の細民をして、老いたる親、馴来し妻子と優游せしめ、同じく太平の餘沢に浴せしむべき機あればなり。其説よろこぶべきを憂ふるは、衡の持し難きに苦しめばなり。

かくして人本業にかへることを得ば、民力専ら農桑に歸し、地力盡つくすことを得て、地の物を生ずること、ますます多くして、男女餘布餘粟有り、金銀偏重の勢なく、各其力を以て金銀を蓄へ、然しかして暇日孝悌忠信の教を施せば、人米粟布帛ふはくの貴きを知り、金銀通利の物たるを知り、廉恥礼讓の風興すべし。慈愛惻隱の情養ふべし。夫れ人々足る所あれば、食まれず衣られざる金銀を、誰あつて息を出し借る者あらん。借る者なければ、金銀を貯る人も游手となりて、産業に成り難き故、これも各四民の務に本づくなり。金銀通利の上より觀れば、有金の人は最も有用の人にして、造化を賛たすくる上より觀れば、頗すこぶる游手と相類す。造化の功を賛たすけると、士の太平を守ると、農工の物を造り出だすと、商賈の有無を通ずる外、皆游手なり。游手勝てば、四民の業つかる。四民の業つかるれば、国本終つひに弱し。今天下の勢、末を追ひて金銀の便利を知り、其息を積んで游手とならんことを冀こいねがひ、米粟布帛ふはくを賤しんで、餘分を家に蓄ふるの道を知らざる程に、上下市井の心になり

て、久安の計に暇なく、こゝに於て、僧は仏を売り、巫は神を売り、学者は道を売り、医は薬を売り、形はさまざまかはれども、心の商賈に非ざるはなし。かくまで久しく人の心に染みたる金銀なれば、たとひ聖人出でたりとも、一朝一夕に金銀の軽く、六府の重きをば知らしめ難かるべし。然りとて、金銀を一切に除き去りて、治をなせとにはあらず。何とぞ費用多き所の故如何んとたづね、借るべき天下の源を塞ぎ、有金の家をして、天下の百貨を網することを得ざらしめて、諸侯の國小康を得、四民其業を樂しむことを得べし。是れ平準の要領なり。金銀もと美物、国家を有する人は、布粟金銀、府庫に満ち、下をして兼并偏重の勢なからしめば、用を通ずるの能、まことに諸貨の及ぶところにあらず。軍中の捷利、民間の必用、有国者のかぐべき者にあらず。それ金の山にある、土石の精英にして、至て得難し。至美至重、万国皆望をこれに属す。然ればこれを得んもの、土石の如く思はんこと、下人巧の勞疲を察せず、上造化の精英を貪り、国を有する者は国を傾け、家を有する者は家を破る。且つ各国其境界あり。界を出づる者は再びかへらず、最も慎まざるべけんや。五事略に載せたる所を考ふるに、長崎一所、官より海外へ出づる所、正保五年より宝永五年まで、六十一年の間、金二百三十九万七千六百兩餘にして、銀三十七万二千二百九貫目餘、銅寛文三年より宝永五年まで、三十六年の間一億一万一千百四十九万八千七百斤餘、此計の外なる者、其れ幾くと云ふことを知らず。大概これに三倍して、我国見在に遺る者、三分の一と云へり。今狡黠の商賈、一身の利をはかるが為に、しばく金銀を海外へ洩すこと、疾むべきの甚しきなり。嗚呼、金銀世の害をなす者ならんや。人の金銀をして、害をなさしむるなり。夫良医は烏喙砒石を用ひても、よく病を愈す。増して諸貨運輸の能、船よりもとく、車よりも速やかなるをや。然れば則ち金銀は、多くば多き程猶よかるべし。是を以て衡を持する人、権柄を得ざる時は、多ければ多きに傾き、少ければ少きに傾きて、同じく人を苦しましむ。もし権柄を得る時は、多少共に平を得るなり。其故

は、六府の用に達し、兼并偏重の煩なればなり。これに就て世の費用を考ふるに、古はなくてすみし物の、今は去り難き物、其数をしらず。浮屠家の教は最も久し。裳瘡なども、昔はなかりしとかや。有益無益につき、あらゆるこれを数ふるに、天文地理の学、西洋を精しとす。靡疽金瘡の治、又相亜ぐ。木綿・火器・望遠鏡・自鳴鐘の類、最も重宝をなす。天教・黧瘡、最も疾むべし。然して天教は、已に根を絶つ。黧瘡は世に蔓延す。蕎は二百年の物、茶は千年の物、人家日用の具となる。髮膏又古に見えず。然ふして今や太平百六十年、酒食技巧、淫靡の風、古にあらず。妓樂博奕、人を誤る者数を知らず。若し上古質樸の世に比せば、民生日用の費と半せんとす。豈に畏れざるべけんや。

天文地理の学、梵最も粗なり。漢は稍精し。然れども思量摸索に出でて、実測にうとし。西洋は器を制し、舟に駕し、足跡至らざるの地なし。こゝに於て天地を見ること掌裏の如し。実に千載の大愉快なり。西洋の医治、内を略して外に詳なり。大に漢人藩圉の外に出づ。漢人の治は、むかしの人、五運六氣四一五臟六腑など云ふことを云ひ始めしより、終にこれに誤られて、実測に暇あらず。西人は意を実測に用ゆ。故に人の臟腑筋骨の如きも、数剥して真に試む。故に最も精詳を盡す。蓋し天地に條理あり、未だ條理を得ざれば、実測ありといへども、是を髣佛に得て、猶真に遠し。故に造化を説くに至つては、漢に木火土金水と云ひ、梵に地水火風と云ひ、西洋に水火土氣と云ひ、共に伯仲の説なり。木綿は桓武天皇の頃、崑崙国の人持ち来りしかど殖せず。文禄年中より広まりて、民生に益あること五穀につき、桑麻の上に出づ。鉄砲は後奈良帝、天文癸卯八月、薩州種子が島の主時堯、これを蛮人武良叔舎、並に喜利志多陀孟太と云ふ二人より伝へ、泉州堺橘屋又三郎と云ふ者、鍛鍊の法を委しく伝へ、今にたえず。豊後には、これに先達つこと二年、辛丑に當つて、フランスクスサベイといふ者来りたり。是は西洋波羅多伽見と云ふ

国の者にて、後天竺にて死したり。唐の書には、フランスクス 仏来釈古者といへり。石火矢もこれが豊後に伝へたり。始めてうちし時、衆皆潰えなだれて、肝をけしけり。因て国崩しと名付けたり。武良叔舎、仏来羅古舎 皆一人にて、フランスクスの転音なるよし、白石先生の説なり。尤も抛とすべし。さて、人これを大友亡国の兆といへり。昔より銀漢などは、水精など云ひて、唯氣の様に思ひたり。近頃望遠鏡渡りて、皆星なることを知れり。蓋し混地の体円にして、海水これに湛ふ。其内大壤二つあり。一つは北に在りて東西に長し。一つは中に當つて南北に長し。北にある壤を二大洲とす。西を欧羅巴、和人エロツパとも云ふ。即ち西洋なり。噶蘭地オランダなども其中なり。東を亜細亞、アジア 唐日本天竺など其内なり。東西の中間なるを、漢人利未亜リビアと云ひ、西洋の人はアフリカと云ふ。中に當る壤を二大洲とす。南を南亜墨利加州ソイテアメリカと云ひ、北を北亜墨利加州ノルトアメリカとす。又南大海中、墨瓦臘尼加メカラニカと云ふ地あり。昔、西洋の人見つけて、これを加へて六大洲と云ひしが、追々尋ね見し所、殊の外の小島ともいへり。因て大洲五とす。亜墨利加アメリカの地は、大概此国の下に當れり。北亜墨利加ノルトアメリカの内、新伊把亞ノイバニアと云ふ国有り。これは西洋の伊把亞イスバニアとりて、此名を加へたるなり、慶長十五年の秋、この新伊把亞ノイバニアの商船、風に放たれて我国に漂ひ着きたり。官より其船を修理し、資糧を具し放ち還さしめ給ひしが、同じき十七年の夏、其国より使船を遣はして、恩を謝したり。其時の礼物として、自鳴鐘を獻じたり。これ自鳴鐘の始めなり。是等の類は、伝へて重宝とする所なり。天主教、西洋の人はキリストアンと云ひ、和人は切死丹と云ふ。漢には明の隆慶万曆の頃、泰西の利瑪竇たふらかと云ふ者、明へわたり、浙江府の内にて、荒地の有りけるに、一字を作り学文し、書など著し人を誑たぶらかしけるに、追々靡廸我たぶらかと云ふ者又来り、金銀など授けてすゝめける故、次第に其道広まれり。此方にては、仏来釈古者等、豊後にて其道をすゝめしより起りて、其流を汲む如漏法師・因果居士・無遍など

云ふ者、専ら此道を以て大友義鎮を講たからかす。大友深く之を信じて、筑紫の神祠仏院、この時多く毀廢に及ぶ。此こと大樹光源院義輝に聞え、如漏法師を召し、織田信長をして、其法義を糺さしむ。信長淀の屋鋪に於て、既の口にて其状を聞き、直に櫂の棒にてこれを擊殺し、其首を梟きようせらる。義鎮大に怖れ、大徳寺より真齊和尚を招き、祝髪して休菴宗麟と号したり。されども其流波たえず。秀吉其民を惑まどすを忿いり、文祿の頃、件バテレン天連六人、伴類二十餘人召捕り、肥州長崎に於てこれを磔はりつけにす。因て海外の市舶を停めんとありけれども、長崎の民歎き請ふに因つて、其事やみにき。されど其道を誘ふ者たえず。寛永十四年、凶徒肥前嶋原に聚りて、官命を拒む。翌十五年春、凶徒誅に服しぬ。其後、天教を奉ずる諸国の市舶、通ずることを許さず。禁を冒して戮に陥る者、前後に通じて二十八万人、其法終に絶えたり。黴瘡ばいそう、相思たほこ、同じく西洋より入りて、今にたえず。カルタなども、其国の物なり。蓋けだし烟草たばこの其始めは、南亞墨利加の内、亜勒利西那アロリカナと云ふ地あり。其海中に十八の島あり。總じてこれをマリカランダと云ふ。其内の一島セントヘンセントと云ふ。この島より創めて作り出だせる草なり。我国には、天正の初の頃とも、又慶長の十年に渡りしとも云へり。うえ始めたることは、肥の長崎桜馬場に作りそめしより広まる由、西川子はいへり。酒色の二つは、古人の訓戒そなはれば、今更改め云ふに及ばず。烟草たばこは酒などの様に、人の心を蕩かす者には非ざれども、其味辛く、其氣臭く、これを服する者は、口氣甚だ悪し。一能を見ず。男女姪奔の媒をなし、動やもすれば火を失して、大なる者は数千家に至る。然しかして今の失火、半は烟火に属す。土地を費し、糞壤を食み、金帛技巧、費用甚だ広し。国家其失を監たみ給たまひ、慶長十三年、令を下して禁じ給ひしかどもやまず。元和二年には烟草たばこ島につくることを許さず。禁を犯す者は牢舎、其処の代官過料五貫文、其村中の百姓一人につき過料百文宛と命ぜられしかどもやまず。終ついには高貴の玩となりぬ。

黴瘡、烟草、誠に天主の遺毒、最にくむべき者なり。茶は烟草に比すれば雅物なり。害も亦浅きに似たり。茶は嵯峨の天皇弘仁六年、畿内及び丹波播磨等に頒ち植しめ給ひし由なれども、僧の榮西歸朝の節、種子を携へて柵尾の明慧上人に贈られしより、幽人清賞の具となりぬ。足利の公方慈照院義政は、天下の政治に倦み、職を其子義尚に譲り、東山東求堂に閑居し、銀閣を作りて、鹿苑公の金閣に比し、猿樂を修し、茶礼を玩ばれしより、其道次第に世に広まり、其道の名人輩出せり。中に太閤秀吉の比、堺千利休、其譽れあり。古器の価など定めしに、後には私慾出で来りて、己と親疏好悪により、新しきをも旧しとし、賈をも真となし、心のまゝにふるまひしかば、太閤怒らせ給ひ、からめてこれを誅せられぬ。其道にとりては、奇代の人と称すれども、名教中よりこれを觀れば、大に間然すべき人なり。此時、二條院の御陵、洛北舟岡山にありけり。然るを利休その御塔石をとりよせて、茶亭のかざりとし、餘れる石を以て、手水鉢などに用ひしが、如何思ひしにや、踏石にまではせざりし由なり。昔周室衰へたりし時、楚子鼎の輕重を問ひしだに、清議これを許さず。いかに朝家の権、武家に歸したりとて、天つ日嗣は未だ地に墜ちず。宗易が茶、天下の觀を極むとも、伯夷は酌まじと覺え待る。文王は土中の枯骨を得給ひても、深くこれを埋め給ひき。王者の政は、孟春の月には掩、酪埋、鬻事、恩枯骨に及ぶなり。加藤清正は、身武人たりと云へども、南面して孤と称す。人の仰ぎ瞻て法をとる所なり。然るに山科元慶寺に有りし僧正遍昭の塔を本国寺勸持院に引きて燈龕となし、喫茶の興を助けしとぞ。悖逆を論ずれば、利休の下につくといへども、其任を論ずれば、其身君師の責あり。国祚の長からざるも、故あることにとやと思はる。茶、義政に成りて利休に至る。其人を見て其道を思ふべし。高貴茶を賞してより、終に天下日用の具となる。精麁品を同じふせずといへども、終に一日もすつべからざる者となる。近来髮に膏を用ふると、神祠に燈籠を点

ずると、同じく廃しがたきの品となる。猿楽は、昔は唯怪しくをかしきことなりしを、義政修して観世観
 阿彌作り出し、能と云ふ者になりぬ。武家古楽を廃せしかば、今は武家楽となりぬ。然れば当時小笠原の
 礼と、聊か礼楽に備ふべし。さて三絃は、本の小山の詞に、三絃玉指雙鈎手、小字頭シテル贈玉娥兒とあれば、
 元の頃よりあるよし貝原いへり。されどわが豊中に伝はる所は、永祿六年大友氏より石松いしまつ檢校を朝鮮に
 使せしに、洋中風にあひ、漂流して琉球に至れり。其俗蛇を避くるとて、常に鼓弓を人ごとに弾ず。石松
 これをならひ、豊後にかへり、此器を制し、組くみなど云ふ手をつけて玩びけるに、広まれりともいへり。淨
 瑠璃は小野の於通、太閤より、昔紫式部清少納言各文を著せり、是に習ひ、一書を奉るべきよし承り、退
 いて自ら思ふには、何れ古人の筆には儔ふべからずとて、義経東下り、矢矯が宿の淨瑠璃御前と云ふ女
 に懸想けそうして通ひけることを、面白ふ作りなして、秀吉に奉りしかば、御感に入り、殊に時の人も、もては
 やしけるより、後には節などつけ、色々に昔のことを作り出し、西の宮傀儡師と一つになり、操と云ふ者
 になり、又俳優これと並び起りて、偶をなせり。俳優、こゝに歌舞妓と云ふ。妓は女の称にして、今の歌
 舞妓は男子なり。慶長以前、人僧衣を着けて鉦かねをたゞき、仏号を唱へて、念仏躍と云ふ者ありしに、同十
 九年の頃、名古屋山三郎と云ふ者、出雲の巫女みこ、国と云ふ者に密通して、国に刀をさゝせ、頭をつゝんで
 早歌を教へて舞はせけるに倣ひて、終ついに男子女の装をなし、且つ舞ひ且つ姪を売ることになりぬ。寛永の
 頃、遊妓の禁有りしより殊に盛にして、往々女子に混じて事を過まつ。よつて官頂髪をさらしむ。因て紫
 華巾を製して首飾とす。亦宛然として婦人なり。今復稍く髪を長くして昔に復しぬ。躍歌舞妓、名は猶なほ
 昔にして、物は昔にあらず。かふやうの物は、其大なる物にして、其小なる物は挙げて数ふべきにあらず。
 さりとて人情の赴く所、やむべきにはあらざれども、人は上一人より、下億兆に至るまで、天を放し天に

事ゆることを忘るべからず。上の施す所の者は広ふして、下の施す所の者は狭し。広狹施し異なりといへども、分に從つて、天に事ふるに於ては異なるなし。天地之大徳を生といへば、生に惇るを不徳とす。故に天地に生々する物を戕賊する事、最も天に畏れざるべけんや。書に無益をなして有益を害することなかれと、聖人も警め給へり。今の人の弄び、半は無益にして、有益を害す。天地生々の徳に惇る事なり。

最も国初に比すれば、田野闢けたるも多かるべけれども、それは又人も増したり。今の世に居て古を思へば、今節儉を盡すとも、猶古の侈れるに齊しかるべし。然るをまして、游惰にして奢侈なるをや。畏れても猶畏るべきことなり。然れば今日庶人の厚生を謀らんとならば、唯儉勤廉恥の風なるべし。儉勤廉恥の風興らざるは、制度の立たざるよりなり。制度は則ち礼楽の制度なり。制度立たざれば、礼楽も施す処なし。後世の風俗に染み、唯利のみこれに慣ひたる人は、礼楽の道を説けば、迂闊なりとて笑ふなり。されども国家長久、永世平安の道、礼楽制度に非ざれば立つこと能はず。されば漢の高祖、身匹夫より興り、秦を亡し楚を斃し、一時の豪傑を役使すること、嬰兒を掌上に弄するが如くなりしかども、礼制立たざりしかば、宴を賜ふ折節などは、群臣功を争ひ、劍を抜き柱を撃ち、狼籍如何ともすべからず。叔孫通これが為に、弟子と礼を肆はし、終に朝議を引きしかば、一朝肅然として震恐し、大に敬ひ謹しめり。高祖大に説んで、吾廼今日皇帝の貴とするをしとありしなり。高祖は昔の高祖なり。秦楚を挫ぎし勢にも及ばぬ所を治むるは、斯れ文の徳なり。礼教は人を未然に治むる者にして、政刑は罪を已然に戒むる者なり。已に然るを戒むれば、民免かれて恥ることなし。未^レ然を治むれば、恥有りて且つ格し。廉恥礼讓の風興らざれば、いかでか利用厚生の道行はれん。噫、孔子の聖を以てだに行はれざりしことなれば、かく人の請合はぬも尤なり。周公は礼楽を制作して、周家八百年の基業を開き、王莽は礼楽を制作して、其身をだに保たざりけり。礼は其人を待ちて行はるゝ

者にして、其人に非ざれば、事を擾るも知るべからず。たとひ事を擾るとも、擾るは其人の罪にして、礼教の罪にあらず。詩にも、飲^シ之^ヲ食^シ之^ヲ教^レ之^ヲ誨^レ之^ヲと云ひ、論語にも、既に富む、これを教へんと云ひ、孟子にも、有^レ恒^レ産^レ者、必^ニ有^レ恒^レ心、無^レ恒^レ産^レ者、必^ニ無^レ恒^レ心ともいへり。誠に兎は饑餓たるに啼き、妻は凍えたるに号ば、人夷齊^{四二}に非ざるよりは、孰^レか廉恥の操を保たん。晋嘗て正しく聞きぬ、去ぬる荒年、小民飢ゆる者ども多かりし中に、某の所の一民、飢の忍び難くてや有りけん、人の圍なる蕪^{かぶら}抜けるを、其主見咎めければ、最も恥しく思ひ、衣打ちかづきて臥しぬるが、終に食を絶ちて死しけるとぞ。若ばかり狷^{けんかい}介の人にてても、饑寒には操をあやまつなり。此処をよくよく考れば、罪は人々己が造る様なれども、民に上たる人の徳より起ることなり。然れば人主を始として、これに羽翼たる輩、自身を責めざることを得んや。此故に政は生を厚ふするに在り、生を厚ふするが為に、用を利す。生薄ければ、貪らざることを得ず。生厚ければ、貪る心うするぐたとへば溺を救ふが如し。自ら水に溺るゝ時は、子溺るゝといへども顧ず、自ら舟中に安んずれば、猶^{なほ}犬の溺るゝを見て打ち過ぐる人はなし。唯勢の足ると足らざるとのあいだなり。故に民生厚ふして、然して後礼讓廉恥の風唱ふべし。民生厚しといへども、礼讓廉恥の風興らざれば、華奢放恣に赴く。華奢放恣なれば用足らず。用足らざれば又貪る。故に賄賂争奪興るなり。夫れ君は臣の表なり。臣は君の影なり。表正しければ影直し。表傾けば影斜なり。君にして身正しからざれば、令すといへども行はれず。さる程に国家に長として社稷を守るの人は、国家は祖宗の国家にして、社稷は民生の社稷、其一身を奉ずるが為に非ざるを知るべし。天地の大徳を生と云ふ。生の徳を害する者、乃ち天地に悖^{もと}るものなり。此故に漢書に、背^テ本^ニ而趨^ル末^ニ、食者甚衆、是天下之大殘也、淫侈之俗、日々に長、是天下之大賊也とあり。人、貴賤の隔あれども、齊しく天地の子なれば、大人も小人も、天に敬しみ事^{つか}ふるには隔なし。天地の大徳を害するは、最も恐るべき事なり。

然れば各其分に応じ、残をふせぎ賊をいましむべきことなり。其事乃ち經濟なり。廻ち利用厚生正徳なり。されば利用厚生に何程よき道を得ても、己れ徳を正さざれば、令する所好む所に反すれば、民従はざる習にて、礼讓廉恥の風おこらず。いかなる良国善謀ありても、これを起すに従ひて、下吏諸有司、金設けの趣向となり、これを餌として悪徒財をつり、人を虐たげ、今まであらぬ害など引出だし、功ならざるのみか、世の笑とはなり侍る。此故、三事、利用を初とし、厚生を本とし、正徳を主とす。徳正しき時は人感化す。其指揮水の壑におもむくが如し。何れのことかならざらん。君はすなはち陶冶なり。下は則ち土鉄なり。その器をなし用をなさんことは、全く陶冶の手中にあり。

予此書成りて後、桂秋齋の間語を得て読むに、足利の比の物価を載せたり。曰く、室町殿日記に云ふ、一、中間衆の木綿三十五疋買ひ取り、御役船彦三に上せ申候。可有御受取候、こつまもめんは、今程一疋に付き壺六分二厘の売買にて候。是もこつまにおとらぬ木綿にて候。壺六分宛にて候間、其御心得可有之候。一、御局衆はした衆、切米拾式石うりはらひ可申由被仰越候。此比兵庫の売買、壺石に付き六分三分出しの由、すいたや新左衛門申候。其御心得可有之候。

十二月二日

林 甚五郎

岡村忠左衛門殿

佐野権助殿

飯尾五左衛門殿

予が言の妄ならざるを徴するに足れり。故にこれをのせて見ん人の考証に供ふ。

価原 畢

註

- 一 序の意。
- 二 周期 年き(定)め。
- 三 月を更るくする者 日雇。
- 四 歉歳 凶年。
- 五 直値。
- 六 上田君 この人の伝は不明。
- 七 杞国 杞憂の意。天の崩れ墜ちんことを憂いた杞国の人の故事にもとづく。
- 八 燕山 燕山より出ずる玉に似て玉に非ざる石。
- 九 廡下 のきした。
- 一〇 禹謨 この引用文は、書経の「大禹謨」の篇にあり。
- 一一 箕子 殷の紂王の臣、『洪範』の作者。
- 一二 耒耜 すき。農具の名。
- 一三 庸作 賃銭を受けて働くこと。
- 一四 代田 年々場所をかえて耕す田。
- 一五 糶 米を買うこと。
- 一六 乾金 乾字金の略、金銀改鑄のこと。
- 一七 糶 穀を売り出すこと。
- 一八 春臺 太宰純。彼の『経済録』は一〇巻から成り、徂徠の『政談』とともに耒大な政治経済の書。『日本経済叢書』巻六に収めてある。

- 一九 楮鈔 紙幣をさす。
- 二〇 燕安 心くつろぎ楽しむこと。
- 二一 陶朱猗頓 陶朱は越王勾踐の臣。貨殖の才に長じていた。猗頓は春秋時代の魯国の富豪。
- 二二 蘇秦、張儀 蘇秦は職国時代の策士、秦の恵王に説きて用いられず、燕趙に説いて六国の合縦を計画し、同盟をつくり、秦にあたり、自分は六国の宰相になった。張儀は蘇秦の僚友。いずれもここでは能辯家の意。
- 二三 六国 齊、楚、燕、韓、魏、趙の六国。
- 二四 建襄の世 太平の世。
- 二五 屯を亨し塞を濟ふ 生活の困難を救うの意。
- 二六 乾没 財利をきびしく民より取りて己の有とすること、一説に、利を得るを乾といい、利を失うを没という。
- 二七 錙銖 極めて僅少のもの。
- 二八 糝 しいな、実ならず。
- 二九 鷓 たか。
- 三〇 倍蓰 倍は二倍、蓰は五倍。
- 三一 蕃昌 繁昌に同じ。
- 三二 白圭云云 白圭という人、水を治め、堤を築き、水を隣国に注ぎ、自国の水害を免れたということ、『孟子』の告子篇にあり。
- 三三 餘ん 餘分の意。
- 三四 輿儻 しもべ。召使男。
- 三五 芻隸 草刈人。
- 三六 蠹虫 木くい虫。
- 三七 變理 やわらげること、調えること。書経に「論道、變理陰陽」とあり。

- 三八 鼂錯 漢の潁川の人。文才をもって政治に活躍し、名声を得た。
- 三九 大倉云云 この語漢書にあり、ひね米（舊穀）の積み重なること。
- 四〇 烏喙砒石 毒草、とりかぶとの異名。砒石は劇毒を含む鉱物。
- 四一 五運六氣 五運は木火土金水の五行の運転の意。六氣は寒・暑・燥・湿・風・火の六つ。
- 四二 夷齊 伯夷、叔齊。
- 四三 桂秋齋 多田義俊の異名。著書多し。『国書解題』はこの人に『秋齋間話』なる著書のあることを記している。

解 説

価値とは価値の根本という意味である。ここで価値というのは労賃の価値のことである。この価値の元を探る、それがこの書の課題である。学問は事物の根原をさぐることであり、ヨーロッパの学問の思想の根底にあることであるが、学問に対する梅園の解釈は、その点でまことにヨーロッパ的であったことができる。哲学の根本問題の根原を探り求めること（梅園の言葉でいえば、「條理の原を探窮する」こと）が、彼の名著『玄語』の課題であった。『価値』が書かれたのは、安永二年（一七七三年）であるが、その頃は『玄語』が二十年に近い思索を経歴して完成しようという時であったから、梅園はどんな現実的な問題に対しても、すぐれた学問的解釈を示すほどの思索力をそなえていたといえることができる。そこへ杵築侯に仕えていた上田という藩士が、一般に奉公人たちの賃銀が年毎の景気不景気につけて変動することへの疑問を解いてくれと梅園に頼んだ。疑問の要点は、この書の序文に簡約されて、語られている。梅園の辯証法的な思索方法に対して、現実の問題が呈示されたのである。それへの答えがこの『価値』の内容である。

梅園はまず労賃という価値（現実には米や麦でもって支払われるにしても）金銭でもって計測されていることに着目した。しかし、労賃を請求する農民たちの生産するものは、「黍稻桑麻」などである。梅園はこれらを農民が「作り出す」ことを問題の根底に置いて考えた。そして、何故に豊年凶年などの年々の生産の変化にに応じて、労賃が急激に変動し、「雇われる者も雇う者も共に困憊こんばいするか」という疑問の要点に触れようとしている。金銭と生産物を合わせ考えた例は梅園以前にもその例がなくはない。金銭における価値を紙幣や铸貨の発行の根本に戻って考察した前例もなくはなかった。しかし、貨幣の通用額の多いことと賃銀の、否、一般に物価

の高低とを合わせて考えた学者は梅園以外に求めることはできない。融通する貨幣が多過ぎた場合、殊に通貨のなかでも通貨の粗悪のものがひろがったとき、貨幣の状態はどうなるか。ここへ思案の光りを投げ込んだ経済学者はかつてなかった。河上肇、福田徳三博士が、梅園の貨幣論の主張を「グレシヤムの法則」と対照させて、この書（『価値』）に人々の注目をひかせたのは、右のような梅園の貨幣融通の理論を評価したことに外ならなかったのである。梅園は辯証法の論理（「反観の法」）に精しかっただけに、抽象力において秀でている。通貨や貨幣といったような錯綜した社会現象を考察する場合、彼は社会をば「一つの島」へと縮小し、抽象し、この擬似社会において問題を分析している。このような学的方法は梅園に特有である。この書を細く読まれる読者は、著者が反観の理をもって現実の複雑な問題を解くことにおいて、如何に「学問的」優秀さを示しているかを、見出されるであろう。

梅園以後にあって、物資の生産とそれらの動きについては山下幸内や海保青陵のような学者が出はじめているし、秀細農民たちの困窮を憂える学者としては梅園の外に中井積徳のような思想家があらわれているから、『価値』のような貴重な経済論の思想は、すでに当時の社会の人々のうちに孕まれていたといふべきであろう。校訂であるが、三浦家所蔵の梅園自筆本にもとづき、なるべく原形をそのままつたえるに努めた。「引」は漢文なので和訳して置いた。

- 『三浦梅園集』（岩波文庫、一九六七年七月、第六刷、岩波書店）所収。
- 旧字は新字に改めた。
- 底本にある振り仮名のほかに、読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。振り仮名は現代仮名遣いにした。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。